

批評—文学と言語

成田成壽教授還暦記念論文集

研 究 社

1971

目 次

I. イギリス文学批評

Red Cross Knight を助ける Una の愛	野 村 行 信	3
Shakespeare 性格の個性化と非個性化	大 山 俊 一	14
不合理と慣習と喜劇の成立	大 山 敏 子	26
<i>The Merry Wives of Windsor</i> の Falstaff	山 田 継 雄	36
『楽園喪失』と離婚論——楽園脱出の原理	新 井 明	45
スウィフトの否定的表出	棚 沢 雅 子	56
作者と語り手と読者と—— <i>Tristram Shandy</i> の場合	中 村 純 男	65
Samuel Johnson の Juvenal Imitation	中 川 誠	76
Not a Holiday Writer——ゴールドスミスの文体		
への序説	玉 井 東 助	94
キーツの神話的想像	宮 下 忠 二	103
“That Heat of Inward Evidence”——Tennyson		
における「承認」の問題	荻 野 昌 利	115
Dickens 批評の方向	宮 崎 孝 一	127
美と永遠——ペイターにおける唯美主義の展開	中 村 義 勝	137
ヴァージニア・ウルフにおける読者意識	横 山 幸 三	150
<i>Lady Chatterley's Lover</i> の主題——和解の幻想	倉 持 三 郎	160
歴史的時空の解体と Incarnation——Charls Wil-		
liams の世界	山 形 和 美	170
伝説の旅人たち——Joyce と Beckett	川 口 喬 一	183
Pinfold 氏の幻聴をめぐって	佐 藤 匡	194
E. M. Forster における ‘Panic’ の意味	中 田 保	204

II. アメリカ文学批評

Hawthorne の Ambiguity	大 庭 勝	217
Marianne Moore の詩	福 田 陸 太 郎	228
T. カポーティの短篇小説の世界——『クリスマスの 想い出』を中心として		
	岡 田 春 馬	237
事実と想像力——W. Styron の Nat Turner 像 . . .	岩 元 巖	250
Styron における “Faulkner”——W. Styron 論序説・森 田 孟		260

III. 批 評・言 語

「批評の時代」の終り	赤 祖 父 哲 二	273
文学と現実	富 原 芳 彰	282
ロマンティシズムとリアリズム——現代アメリカ文 学の一考察		
	白 川 芳 郎	293
「あいまい性」の「あいまいさ」	外 山 滋 比 古	304
‘Ars Poetica’	外 山 弥 生	314
文学の図像学的研究について	吉 田 正 俊	325

* * *

MEi, ū の 16 世紀の音価	荒 木 一 雄	335
隠された表現	郡 司 利 男	346
Benjamin とことば	大 沼 雅 彦	356
同義語・反義語とその選択制限	田 中 春 美	369
‘強調の do’ について	若 田 部 博 哉	381
言語理論と辞書	安 井 稔	393

成田成壽先生年譜		405
あとがき・論文執筆者		412

I. イギリス文学批評

Red Cross Knight を助ける Una の愛¹

野村 行 信

Spenser の特質をもっとも強く示しているものの一つに、有為転変の実相がある。この世のものはすべて変化してやまず、一定不変のものはないというのである。無常にして転変をやめずというのは、Spenser が創始した思想でないということはいうまでもない。が、しかし Spenser の多くの詩にはこの無常観が一貫して流れているのである。この無常観の思想に竿さして、いかに人間は生くべきやという課題こそ、彼が追求してやまなかったものである。変化の実相は絶対的なものと肯定しつつ、この変化の中にあって、この変化を乗り越え、変化に打ち勝つ方策を理想として樹立したのが *Faerie Queene* であると言えるのである。この理想をもっとも適確に歌ったのは、*Mutabilitie Cantos* の最後から二番目のスタンザにおいてである。それは女巨人 Mutability の訴えに答えて女神 Nature が下した判決の一部である。つまり「一切のものは、…変化によって自己の存在を拡大し、最後には、再び自己本来のものに立ち返り、運命によって定められた自己の完成を遂げるのである。…」という思想である。この「自己の完成を遂げる」という理想を、具体的に歌い上げたのが、Red Cross Knight の苦闘の物語である。田夫野人であったこの騎士が、多くの変化、つまり悪をひめた誘惑や欺瞞を経験し、絶望や死の苦しみを味わい、それを土台にして成長を遂げ、自己の存在価値をいっそう拡大し、死後における永遠の生命を約束され、ついに完全なる人間になるのである。

¹ 第四十回日本英文学会においてのシンポジウム『Edmund Spenser: *The Faerie Queene* における「愛」とその表現について』における発表に加筆したものである。

完全なる人間になる道程は、極悪なるものの示す道程との対比によりもっとも明白に示されている。永遠の生命は永遠の死との対決によって描き出され、それはまた善と悪との葛藤という形で歌い上げられ、教えながら楽しませるという Sydney の詩の目的を同時に具体的に見せているのである。主人公は極端な悪を経験し、そこから脱却し、善への悟りを得るのだが、それを得るための契機が必要となり、それが愛という形態で表現されてくるのである。その愛には、大きな神の愛、これはキリスト教の世界では、第一に必須のものと見做され、これに比べて人間の愛は常に二次的なものであり、あくまでも神の愛を得るための前提とされているのである。Red Cross Knight が永遠の生命を得るのは神の愛によるものとし、それを得るために Una という女性の、やさしい、真実のあふれた、献身的なとりなしと尊敬心にみちた全面的な信頼心が愛となって助けて行くのである。

Red Cross Knight が永遠の生命を得るためには、別ないい方をすれば、この地上においていくつかの使命を果たさなければならない。その第一の使命はまず Una の両親を Dragon から救出することである。その使命達成の事情が第一巻となって物語られているのである。それ以外の使命は、Una との結婚後、6 年間 Faerie Queene に仕え、異教徒の王 (Paynim king) との対戦 (xii. 18) にあるようであり、多分これの方がいっそう大きな使命と思われるが、この騎士は第一巻以外は、第二巻の第一キャンター、第三巻の第一、第二、第三キャンターにほんの少し登場するだけであって、異教徒の王との対戦はなく、さりとて具体的にはっきりとした使命はないようである。それぞれの巻の主人公を登場させる際の橋渡しの役(第二巻)か引き立て役(第三巻)をするだけである。これはこの詩が未完であるためやむをえないと考えられるのである。従ってこの騎士の使命は Dragon 退治にその重点が置かれていると見てよさそうである。

その使命達成は容易なものではない。多くの苦難がその道程に待ってい

る。その苦難は、現存する *Faerie Queene* 全体の中でもっとも困難で暗黒な難事業である。最初の怪獣 Error との出会いから、最後の Dragon との激闘までの間の戦闘は、すべて食うか食われるかの死闘である。しかも死闘と死闘との間にあるエピソードの多くは、騎士が知らず知らずのうちに罪に感染したり、腐敗したりするものか、あるいは将来遭遇する苦しみを暗示するものである。これは悪魔的なものが働いて、騎士の帯びている使命を大いに邪魔してその達成を阻まんとしているからである。神に対する悪魔の反逆である。だから Dragon のいる Eden までの道は、悪魔の呪文のかかった道である。

悪魔の呪文のかかった道を突破し、Eden の城内に幽閉されている Una の両親 (Adam と Eve) を救出することは、極端ないい方をすれば、Paradise Regained にも匹敵する事業である。つまり原罪によって失われた Paradise を悪魔から奪還することを意味するのである。そうさせまいと悪魔も全力を振ってそれを阻止する行動に出るわけである。そのため、いかに人間が自己の力を発揮しようとしても、自己の力だけを頼りにするだけでは到底成就することのできない事業となってくるのである。その事業達成のために人間の力を越えた力が望まれるわけである。いうまでもなく神の愛が望まれるのである。それによって神と悪魔、善と悪が対立され、神と善とを象徴するものと、悪魔と悪を象徴するものが、対照的に描き出されるのである。悪の要素が強く働き、誘惑されて正道からはずれて行く騎士の上に、善なるものを守らせようとして、神の愛がもたらされるようにする仲立ちが必要となってくるのである。その役目をするのが Una である。

このような役目を 荷なわせたそもそもの初めは、Sir Walter Raleigh に当てた Spenser の *Faerie Queene* を解説するための書簡の中に見られる。それによれば、妖精の女王に仕える全騎士の中から、Una が、冒険を希望している背の高い無骨の若者を、巨大な龍を退治するという大事業を

遂行するのにもっとも適した人として選ぶようにされている。その選出の条件は、Una が携えてきた武具―揃 (Spenser によれば、エペソ書五章にある、聖パウロによって述べられているキリスト教徒の武具とされているが、実際はエペソ書六章のことだが) がきわめてよく似合い、一座の中でもっとも立派な人に見えた、ということだった。この武具は、聖書によれば、神の武具であって、悪魔の奸計に対抗できるものである、とされている。この武具は、キリスト教徒たる者にとって、神の恩寵を受ける必須の条件であると考えられるのである。この武具に似合うということは、神の愛が赤十字の騎士の上にもたらされるという意義がこめられているのである。かくて Una に気に入られることになるのである。このようにして気に入られた次第は、*Faerie Queene* の中では、第七キャンター四十七スタンザで、Red Cross Knight が Orgoglio に捕われて苦しんでいる様子を Arthur 王に述べてから、伝えられているが、直接武具によったとは言ってなく、その人柄を語っているだけである。それによればこのように書かれている。きびきびとした、まだ経験にとぼしい騎士であって、その雄々しい手を罪にけがれた血に染めたこともなく、その力によって他人の権利を無視して地面に投げつけたことのない人だという風になっている。かくてその武具からは Red Cross Knight が出現することになり、その人柄からは立派な騎士 (a gentle knight) となって平原に駒を進めて行くのである。

このようにして強烈な武具と銀の盾を身につけた立派な騎士ができ上がったとはいえ、赤十字の騎士はまだ経験の乏しい若者であるので、容易に誘惑され、欺かれて行くのである。Archimago の悪らつな魔術のために、Una の潔白が信じられなくなり、そのあげくの果てに Una を置き去りにして行くのである。悪魔的なペイスに巻き込まれ、Una の代りに Duessa を選び、真実なる者を捨てて虚偽なる者を拾うことになる。この状態は、*An Hymne of Heavenly Love* の 159 行にある、「神の座は真理である。忠

実な人は真理を信じる。」という思想に反するわけである。真理の象徴である Una を信じられなくなるのは、神の座を信じられなくなることであり、それはまた神から遠ざかることを意味し、さらに言えば悪魔に近づくことになるのである。Duessa に魅せられてしまったのである。かくて Una によって選び出された甲斐も次第にうすれて行くのである。これはとりも直さず最大の危機が Red Cross Knight に今まさに訪れようとする前兆であると考えられるのである。

もっとも、この最大の危機に直面する前に、Red Cross Knight は身に帯びている甲冑と盾に守られ、Una の適切な助言を得て、Error との戦闘で危機一髪の際に起死回生の勝利を得、あるいは Sansjoy に与えた Duessa の言葉を自分にむけられたものと思い、苦闘から脱して Sansjoy に打ち勝つことができたし、また Sansjoy との戦いでは武具についている十字架によって危機を脱して勝利を得たことは確かである。そのいとも大切な唯一のお守りともいふべき鎧と盾とを身から脱いで離してしまった時こそ、悪魔のつけ入る絶好の機会となるのだ。これは折角得た貴重な選ばれた身分を放棄して悪魔の奸計に抗し得なくなることを意味しているからである。この好機を Duessa は逃がすことなく利用した。そのため Red Cross Knight は力の弱い心の臆した騎士となり、いとも容易に巨人 Orgoglio によって打ち倒されてしまうのである。捕虜の身の上となって、城内の深い土牢の中に閉じ込められるのである。Arthur 王によって救出されるまで、長く苦境にあえぐことになる。その救出の手引きをするのが、騎士を愛する Una である。それも Una の強く正しい愛があったからこそできたと言えるのである。

Una は Archimago の奸計によって Red Cross Knight に一人置き去りにされるが、それでも常に騎士に対してどこまでも深い愛情をいだき続け、変らぬ誠実を守り通して行く。Una という名は一を意味し、truth を象徴し、ここぞという時に適切な助言を与える姫であるのに、Red Cross

Knight に変装した大魔法使い Archimago を見抜けないこともあったのだ。それもひとえに騎士に対する愛情によったのである。いかに愛による誤りであったとはいえ、やはりその犯した誤りによるのか Sansloy によって今まさにおかされそうになるのである。そのきわどい寸前に森の住人フォーンやサータたちによって助けられるのである。この救いを受ける以前にもライオンによってさえ守護されたこともあった。それは Una のこの世のものとも思えぬ美しさのためであった。それを Spenser は次の言葉で示している。

O how can beautie maister the most strong,¹
And simple truth subdue auenging wrong?

また Wordsworth の *Ecclesiastical Sonnets* II. vii. 13-14 に騎士道時代を回想する次のような詩行がある。

The lamb is couching by the lion's side,
And near the flame-eyed eagle sits the dove

これは多分、Una が *Faerie Queene* の冒頭に登場した時に、驢馬にまたがり、そばに乳白色の小羊を紐でつないで連れていた、という句と、この時のライオンの様を思い出して作り上げられたもののように思える。後になって姫が騎士を連れて訪れる「神聖の館」の中で、その所有者 Coelia から次のように言われる。

O happy earth,²
Whereon thy innocent feet doe euer tread,
Most vertuous virgin borne of heauenly berth

かくて Una は美と真と徳(善)を融合して一身にそなえた姫であることが知らされてくるのである。このように善きものの一切を兼備していたからこ

¹ III. vi. 4-5.

² X. ix. 1-3.

そ、ライオンや森の半人半獣的な住人たちに守られ、助けられ、尊敬されたのである。さらに Satyrane に導かれて森から脱出することもできたのである。

脱出してきた途端にまたもや無法者である Sansloy に出会い、おそろれかかるのである。無法者には善なるものは一切通じないのだ。真も踏みこまれるのだ。美は汚されてしまうことになる。無法者が Satyrane と一騎討ちをしている間に、その場から逃れ出て、探し求める Red Cross Knight と行を共にしていた Dwarf にやっとのことで会うのである。Dwarf から別れて以来の出来事を聞き、愛する騎士が Orgoglio によって敗れ、囚われの身となり、生死のほどもはっきりしないと知らされるのである。Una にとって最悪の事態が訪れたのである。その時姫は悲しみの余り三度も失神してしまう。まず最初は、Dwarf の持っていた騎士の遺品、つまり鎧と槍を見て、死の悲しい知らせと思って悲嘆のあまり地面に倒れるのである。小人は介抱するが、悲しみの嘆きを発し、その後も二度失神状態に陥り、やっとのことで小人の話を聞くのだった。その時の悲しい試練にたえようとする姿をこう歌っている。

Which greater grew, the more she did contend,¹
And almost rent her tender heart in tway;
And loue fresh coles unto her fire did lay;
For greater loue, the greater is the losse.
Was neuer Ladie loued dearer day,
Then she did loue the knight of the Redcrosse;
For whose deare sake so many troubles her did tosse.

Una の悲しさがよく出ている。その悲しみに耐えながらも、やはり悲しみから脱けきれず、それでも勇気をふりしぼって騎士の生死をはっきりとさせるため小人と出かけて行く。その途中で Arthur 王に会い、Arthur

¹ VII. xxvii. 3-9.

の大きな働きによって騎士は助けられるのである。かくて助け出された Red Cross Knight は、Una に導かれて、Una の領土に向かって進む。だが傲慢にも Despair の城へ行き、Despair を論破しようとする。ところが相手にいいようにいくめられ、ついには無理に短剣を握らされ、自殺するように追い込まれてしまう。これは、選出されたはずの騎士でありながら、その信仰はこのように移ろいやすく、また罪のけがれにそまりやすい哀れな人間であるということを意味しているのである。生か死か決めかねて、短刀を上げたり、下ろしたりしている姿を見て、姫はその短刀を騎士の手から奪い取り、初めて語調のすどい言葉を使って叱りとばすのである。強い愛があればこそ憤りをはげしく示すのだ。誠にきびしい言葉が、その時十三行の詩行となって吐露される。その中で初めて、

Why shouldst thou then despire, that chosen art?¹

と言って選ばれた身の上であることを強調し、叱咤激励して奮い立たせるのである。

選ばれた身の上であっても、ここまでの騎士の信仰は、Error との戦いで示されたように、ただ己れの力だけを頼りにした不甲斐ない哀れなものであった。だから適当な時に姫の助言が必要であったわけである。Error のために窮地に立って今まさに破れようとした時、Una から「力に信仰を加えなさい。」と助言され、起死回生の契機を掴むほどである。全く力だけを頼みにする傲慢で無知な騎士であった。神を友にして (with God to friend) 進むにしても、Archimago の所では、その奸策によって真実を虚偽と見誤ってしまう。それに虚偽の美女 Duessa を真実の女と認めたりした。そして Despair の所でのみじめさという具合であった。この状態ではとても Dragon との対決は望めないと、Una は知っているのである。

¹ IX. liii. 5.

Dragon を打倒するためには二つの条件が必要である。その一つはゆるぎなき信仰の確立であり、もう一つは罪のけがれからの浄化である。その二つの条件は一つのものかも知れない。この二つの条件から、神の恩寵や愛が得られるからであろう。その二つの条件を満たさないがために、多くのすぐれた騎士が勝利を得られないできているのだ。これを Una は知っているからこそ、Red Cross Knight にゆるぎない信仰の確立と罪のけがれからの浄化を希求するのだ。その願いから、この条件をかなえさせてくれる所である「神聖の館」へ騎士を連れて行くことになる。

この「神聖の館」と全く著しい対照をなしているのは、Una の唯一の敵である Duessa が、さきに騎士を案内して連れて行った「誇りの館」である。「誇りの館」は死を象徴するのに対して、「神聖の館」は生を象徴している。前者は見かけは立派で、広々した道が通じ、そこへ行く人々によってよく踏みならされている。昼も夜もあらゆる階級・地位の人々が大勢その中に入って行くが、そこからもどってくる人は少ないという風だった。マタイ伝七章十三節を思い出させる。「狭い門から入れ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そしてそこから入って行く者は多い。」と聖書は言っている。その「誇りの館」の中には、高慢そのものの女王 *Lúcifera* がいて、六人の顧問 *Idleness*, *Gluttony*, *Lechery*, *Avarice*, *Envie*, *Wrath* がまるで *Seven Deadly Sins* のように政治向きのことを進言しているのである。それに *Satan* さえいるのだ。そこから生まれ出るのは、生でなくて死である。裏口には足の踏み場もない位に、殺された人の死体が、ごみためのように、あわれみもかけられず、適切な葬式も受けられずに捨てられている。まさに「死の城」というべきものである。

この「死の城」に対して、「神聖の館」は「生の家」である。その持主は“heavenly”を意味する *Caelia* という老女であり、この老女は英知によってその「館」を治めている。その門をたたけばすぐに開けてくれる *Humiltá* がいる。マタイ伝七章七節「門をたたけ、さらば開かれん。」を

思い出させる。彼の開ける門は低く、多くの敵を恐れて守られ、その案内する道は大へん狭いのである。まるで「生命にいたる門は狭く、その路は細く、これを見出すものは少ない。」というマタイ伝七節十四節そっくりと言えるのである。Caelia には三人の娘 Fidelia (faith), Speranza (hope), Charissa (charity) がいる。Una の希望により騎士は Fidelia の学校に入れてもらい、信仰に関する教えを学ぶ。その教えを得て心の中に起こる、自己の過去の罪に対する絶望感は、Speranza の希望の銀の錨によって慰みを得て行く。医者 Patience とその近くにいる Amendment によって、内部の腐った所を、治療、薬餌療法、切り取り手術などでいやされる。

さらにきびしい Penance の鉄の鞭での一日一日のこらしめの打擲、はげしい Remorse の痛みつけ、まじめな Repentance の罪の汚点の洗い流しを受ける。多くの幼児をまつわらせている慈母 Charissa は、愛と正義と善行を、また人間に神の憎しみと怒りをもたらす怒りと憎しみを慎重に避けることを教えた。また老女 Mercie によって七人の祈禱師のいる聖なる接待所へ案内され、そこで立派な教えを授けられ、施しと慈善の敬虔な仕事を教え込まれた。次に高い山の頂きに登り、その聖堂に住む聖なる Contemplation のもとにやっとたどりつくのである。神々によって選ばれた人々が住む新エルサレムへの道を示され、やがてその道を通して天国に達し、そこに住む聖徒の一人となって、Saint George と呼ばれるようになると言われる。Contemplation の話から騎士は罪のけがれから完全に浄化され、信仰が確立されたことがうかがえるのである。つまり完全なる人間に変貌したのである。まさに「生の家」である。

「生の家」で永遠に生きる道を知った Red Cross Knight は、この世における使命を果たすために Una のもとにもどって行く。Una が騎士を喜び迎えたことはいうまでもないが、その時の騎士はもはや「神聖の館」に入った時の、弱々しい、体力のうせた敗残の騎士のようでなかった。これまでの無知で無経験な騎士とはうって変り、もはや Una に教え